

An lang kreyòl クレオール語で

北村 一 親

Pou Ugo

Fè kè n' kontan ak moun ki kontan, kriye ak moun k'ap kriye. (Women 12 : 15)¹⁾

0. 序

Se pou limyè fèt²⁾ 「光あれ」

かつては言語学者が言語の起源を追究することは学界において世界的に忌避されており、50年ほど前の日本の言語学会においても同様で、鈴木孝夫が記号論的視点から「鳥類の音声活動」と題する講演を行った際、出席者から「たしか100年前にフランスの言語学会で、人類言語の起源は今後言語学では一切扱わないことを宣言したが、それを知っていますか」という旨の質疑を受けたという。^{2 bis)}しかし、時は移り、幸いにも現在ではこのような軛から解放されて言語の原初の姿を模索する様々な試みがなされるようになってきており、例えば、手話言語³⁾やクレオール諸語⁴⁾に言語の原初形態を見出そうとする動きがある。

筆者は将来的にクレオール諸語における注目すべき諸点を考察するために、さまざまなクレ

1) The Haitian Creole Bible (= CRL). Ebex (Ecole Biblique par Extension) Bib La Tankou Online Bible Teks Pa Sosyete Bib Ayisyen Nan Travay Pa Mark Emerson (pou Ebex) ak Raymond Hamilton (pou BibleSoft) ak Larry Pierce (pou Online Bible). — BibleWorks, Version 5.0. (BibleWorks, Norfolk, VA, 1992-2002) 表記法はこの原典のままにした。

2) Jenès 1 : 3. (CRL — BibleWorks, Version 5.0.)

2 bis) 鈴木孝夫「日本語学はなぜ成立しなかったか」大野晋／柴田武(編)『岩波講座 日本語』別巻、岩波、1978年、283-284頁。(筆者はこれを10年ほど前に北村一親(編)『言語の制御と統合に関する多角的視点からの研究』(岩手大学人文社会科学部研究報告書、1999年)の序言(5-6頁)でも引用して言語学の当時の状況を牽制したことがある。)[日本語学]という名称が耳慣れない時代の話であるが、しかし、この呼称は往時より存する名称であり、安田敏朗によると、いわゆる「満州国」の建国(1932年)と時期を同じくして盛んに提唱されたという。(安田敏朗『「国語」の近代史 — 帝国日本と国語学者たち』中央公論新社、2006年、133頁以下)

また、鈴木に向けられた質問中の「宣言」とは1866年にパリの言語学会の創立総会で「機関紙に言語の起源に関する論文を掲載しない」とされたことである。(亀井孝／河野六郎／千野栄一(編)『言語学大辞典』第6巻(術語編)、三省堂、1996年、472頁右欄)

3) 筆者は拙稿「手話も「言語」の一つとする」(『アルテス リベラレス』82号、2008年、17-42頁)において日本手話、アメリカ手話、フランス手話、中国手話という種々の手話言語の基本的性格を概観し、手話言語相互間の類似性を確認した。

オール諸語, すなわち大航海時代および植民地主義時代の所産であるフランス語, 英語, ポルトガル語やオランダ語(そしてこれらの諸言語に付け加えるならばスペイン語やその他の非印欧語)を基体とするクレオール諸語を言語の原初形態を探求しうるのであるのかどうかも含めて研究することを企図している。しかし, 研究を始めるにあたり「クレオール語」を定義する必要がある, またその前に統一的な理解が難しい「クレオール」という概念の検討が必要不可欠と考え本稿を起稿する次第である。

なお, クレオール諸語の中でも特にカリブ海に浮かぶ大アンティル諸島イスパニョーラ島の西3分の1を占め, 1804年にラテンアメリカで最初に独立したハイチ共和国の国語であるハイチ・クレオール語およびフランスの海外県である小アンティル諸島のマルチニーク,⁵⁾ グワドループ等におけるフランス語を基体とするクレオール諸語(フランス語系クレオール語)を他のクレオール諸語と比較することを中心に据えたいので本稿の欧文標題をハイチ(・クレオール)語で表した。また, 本稿標題が「クレオール語で」という表現で止めているのは今後の研究も思い描きながら, この言語, すなわち「クレオール語」であらゆる可能性を示したいという筆者の願望の故であることをここに明記しておく。

1. 「クレオール」

Sa m' ye a se sa m' ye⁶⁾ 「我は有て在る者」

「クレオール」は異なる複数の文化が混交して生じると一般に考えられており, 時には不当にも「雑種」として捉えられることもある。そして本来, 植民地の人間の出自を表す概念であったものが, 今日では彼らが有する文化を示すに至り, さらに日本では単に「クレオール」で以って「クレオール語」という言語名を表す場合すらある。この日本語における言語名への使用は

4) 本稿では「クレオール語型(諸)言語」を単に「クレオール(諸)語」とする。後に登場する「ビジン(諸)語」, 「サビール(諸)語」もそれぞれ「ビジン語型(諸)言語」, 「サビール語型(諸)言語」を示す。

5) Napoléon I^{er}の最初の皇后, Joséphineの生地である。Napoléon I^{er}はイタリア語文化圏のコルシカ島出身であるが, Joséphineとは異なりコルシカ出身者は「クレオール」ではない。当然のことと思われるこのことは後述する「クレオール」の本質に接近しうる視点なのである。

6) Egzòd 3 : 14. (CRL — BibleWorks, Version 5.0.)

6 bis) 身近なフランス人同僚に尋ねたところ, “créole” という語を聞けば, 人種ではなく, まず第一に「クレオール語」を連想するという。

6 ter) とともに *Le Grand Atelier historique de la langue française. 14 grands dictionnaires de la langue française sur CD-ROM PC*, Version 1.02, Redon, Paris, 2002.

Furetièreの方は前半を Robert Chaudenson が自著の冒頭で引用している: “Le Dictionnaire de Furetière (1690) indique son sens : «Criole : c'est le ^[sic] nom que les Espagnols donnent à leurs enfants qui sont nez aux Indes» (il s'agit ici des «Indes occidentales», c'est-à-dire de la zone américaine); toutefois, le terme va rapidement se généraliser pour tous les Européens nés dans les colonies.” (Robert Chaudenson, *Les créoles*, Paris : Presses Universitaires de France, 1995, p. 3. 下線は筆者による) この Chaudenson の著作の邦訳では筆者が下線を施した箇所を「[インド]というのは, カリブ海の西インド諸島のこと」と訳出している。(ロベール・ショダンソン『クレオール語』糟谷啓介/田中克彦(訳), 白水社, 2000年, 7頁) 日本人の理解を促進すべく「カリブ海の(西インド諸島)」というように“zone américaine”を言い換えて訳しているが, 原典の“«Indes occidentales»”, そして“zone américaine”, さらに“colonies”は本稿にて後に述べるとおり「クレオール」を語る際に重要なキーワードであり, まさにこの順序で語義の拡張がなされるのである。この点を見逃してはならない。↗

英語Creoleやフランス語créoleの用法^{6 bis)}に準えたものであり、使用している当人は日本語として不完全な呼称であるとの意識が希薄なのかもしれない。しかし、さらに重要なことはクレオール語と類似した概念に「ピジン語」というのがあり、この言語(学)的にしか用いられない術語の用法とおそらく混同し、言語である「ピジン」と連動させて「クレオール」を言語として(のみ)捉えているのであろう。本稿ではより正確を期して後に述べるような類型を有する言語を「ピジン(諸)語」および「クレオール(諸)語」と称することにする。

話を本章の主題である「クレオール」に戻すと、この語は本来の用法とはかなり異なった意味に使われるようになったようである。以下に、その変転を各種の辞典類から見ていこうと思う。そして果たして「クレオール」という概念は単なる文化の複合によって生み出されたものであるという理解でよいのかどうかを考えていきたい。

1.1. フランス語圏での「クレオール」

「クレオール」という語の直接の所出となるのはフランス語のcréoleであり、古くはFuretièreの辞典*Dictionnaire Universel* (1690) やCorneilleの辞典*Dictionnaire des arts et des sciences* (1694) にcrioleとして次のような記述が見られる。^{6 ter)}

CRIOLE. s. m. Terme de Relations. C'est un nom que les Espagnols donnent à leurs enfants qui sont nez aux Indes. Les Espagnols qui viennent d'Espagne sont grands ennemis des *crioles*, & empêchent qu'ils ne parviennent dans les charges. (Antoine Furetière, 1690)

CRIOLE. s. m. Nom que les Espagnols donnent à leurs enfans qui sont nez aux Indes. (Thomas Corneille, 1694)

この語を『フランス・アカデミー辞典』*Dictionnaire de l'Académie française*の各版で調べてみると、1694年の初版には記載されていないが、1718年の第2版からそれぞれ次のような記述がなされている。⁷⁾ (下記の引用は記述内容に従ってまとめてあるが、結果として年代順になっている。)

↘ なお、アジアの広範囲を占める「インド」を示す“(l')Inde”と西インド諸島のみならずアメリカ大陸を表す“Indes”に関してはDiderot et d'Alembertの『百科全書』*Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*の該当項目にも記述されているので参照されたい。(L'*Encyclopédie de Diderot et d'Alembert sur CD-ROM PC*, Version 1.0.0, Redon, Paris, 2002-03)

ちなみに、Furetièreの辞典CD-ROM版とChaudensonの引用文がわずかに異なっているためFuretièreの辞典の復刻版(Antoine Furetière, *Dictionnaire universel contenant généralement tous les mots français tant vieux que modernes et les termes de toutes les sciences et des arts*, t. I, La Haye / Rotterdam : Arnout et Reinier Leers, 1690 (Genève : Slatkine Reprints, réimpression, 1970), sig. Xxx2^r)で確認した結果、CD-ROM版に誤字脱字等はなく、品詞と語類表示の部分が誤って斜体になっていたため、筆者が引用する際にこれを立体に修正した。

7) *Dictionnaire de l'Académie française sur CD-ROM PC*, Version 1.0, Redon, Paris, 2002. 最新版の第9版は*Dictionnaire de l'Académie française*, t. I, Paris : Imprimerie Nationale, neuvième édition, 1992, p. 539a. 該当項目が無いため検出されなかった初版に関しては念のため次の復刻版で確認した : *Le Dictionnaire de l'Académie Française*, Paris : Jean Baptiste Coignard, 1694 (Tokyo : France Tosho Reprints, réimpression, 1967).

CRIOLE. s. On appelle ainsi, Des gens nez dans les Indes Occidentales, de pere & de mere Européens. *C'est un Criole, une Criole.* Quelques-uns disent, *Creole.* (deuxième édition, 1718)

CRIOLE. subst. On appelle ainsi, Des gens nez dans les Indes Occidentales, de père & de mère Européens. *C'est un Criole, une Criole.* Quelques-uns disent, *Créole.* (troisième édition, 1740)

CRÉOLE. s. m. & f. Nom qu'on donne à un Européen d'origine qui est né en Amérique. *Un créole, une créole.* (quatrième édition, 1762)

CRÉOLE. sub. masc. et fém. Nom qu'on donne à un Européen d'origine qui est né en Amérique. *Un créole, une créole.* (cinquième édition, 1798)

CRÉOLE. s. des deux genres. Nom qu'on donne à un Européen d'origine qui est né dans les colonies. *Un créole. Une créole.* (sixième édition, 1835)

CRÉOLE. s. des deux genres. Nom qu'on donne à un Européen d'origine qui est né dans les colonies. *Un créole. Une créole.* (septième édition, 1878)

CRÉOLE. n. des deux genres. Homme ou femme de race blanche, né dans les colonies intertropicales. *Un créole. Une créole.* Adjectivement, *Accent créole. Femme créole.* (huitième édition, 1932-35)

CRÉOLE n. et adj. XVI^e siècle, *criollo*. Emprunté par l'intermédiaire de l'espagnol, du portugais *crioulo*, « métis, noir né au Brésil, serviteur né dans la maison ».

I. N. I. Originellement, personne de famille européenne, née dans une des anciennes colonies des régions tropicales de l'Amérique et de l'océan Indien, et plus particulièrement aux Antilles. *Une jeune créole. Une belle créole.* Adj. *L'impératrice Joséphine était créole. Un planteur créole. Une famille créole.*

2. Par ext. Toute personne née dans ces régions, quelle que soit son ascendance. Adj. *Un Noir créole*, né dans ces colonies et non en Afrique.

3. N. f. Grand anneau d'oreille. *Une paire de créoles.*

II. Adj. Qui est relatif aux populations de ces anciennes colonies. *La cuisine créole. L'accent créole.*

Les parlers créoles, les langues mixtes formées à partir des langues européennes, en usage à l'origine chez les esclaves noirs des territoires colonisés, devenues ensuite langue maternelle des indigènes. Subst. *Le créole français, anglais, espagnol, portugais. Le créole de la Guadeloupe, de la Martinique, de la Louisiane, de l'île de la Réunion.* (neuvième édition, tome 1, 1992)

語形に関して言えば、第2版および第3版にあるように *criole* という形が *creole* (*créole*) という形よりも古く、18世紀前半では一般的で、むしろ *creole* (*créole*) の方が使用者が少なかったことが判り、この語の来源へ接近する鍵となる。(もちろん辞典には「規範的登録」がなされているという前提での話であり、辞書への掲載は実際の使用年代より多少遅れる。) *Créole* という語形が見出し語となるのは1762年に出版された第4版からである。1932年に第1巻が出版された第8版に初めて形容詞の記述が見られ、それ以前はすべて名詞となっているが、18世紀の半

ば(本文17巻は1751年から1765年)に刊行された、いわゆる Diderot et d'Alembert の『百科全書』*Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* (“créoles”の項目)では形容詞の記述がすでに見られるので、⁸⁾ 名詞の用法に遅れはするものの、形容詞としての用法も早くからあったと考えられる。

さらに興味深いのは語義であり、18世紀前半に出版された第2版および第3版では「西インド諸島でヨーロッパ人の父母から生まれた人々」を意味し、18世紀後半に出版された第4版および第5版では「アメリカ大陸で生まれたヨーロッパ人」を指している。19世紀に出た第6版および第7版では「植民地で生まれたヨーロッパ人」を表しており、20世紀前半の第8版では「両回帰線内の、熱帯の」という修飾語が加わって「熱帯の植民地で生まれた白色人種」となり、これによりカナダなどが除外されてこの語が示す対象がより明確になっている。これらから判るように *criole* あるいは *créole* という語は「西インド諸島」、「アメリカ大陸」、「植民地」(厳密に言えば「熱帯の植民地」という具合に、あたかも国家が領土を拡張していくかのようにその指し示す対象を拡大していったのである。

注目すべきは最新の第9版で、他の大辞典類に比べるとそれ以前の諸版に比べ数倍の分量があり、本来的な記述とそこから拡張された記述に別れており、これは近年の「クレオール」研究熱の高まりに呼応していると考えられる。⁹⁾

前にも言及した18世紀半ば(本文17巻は1751年から1765年に刊行)のDiderot et d'Alembert の『百科全書』では、¹⁰⁾

CRÉOLES, adj. pris sub. (*Hist. mod.*) nom que l'on donne aux familles descendues des premiers Espagnols qui s'établirent en Amérique, dans le Mexique. Elles sont beaucoup plus nombreuses que les familles espagnoles proprement dites & les mestines, les deux autres sortes de familles qu'on distingue dans ces contrées ; mais elles ne peuvent parvenir aux grandes dignités. Si cette politique est réelle, elle n'a pû manquer d'être suivie des inconvéniens les plus fâcheux, comme d'exciter entre les habitans d'un même pays les dissensions & la haine, d'affoiblir l'attachement à la domination dans l'esprit des mécontents, & de tenir le gouvernement en allarmes, & toujours attentif aux differens mouvemens d'un grand nombre de sujets dont il est peu sûr.

というように、「アメリカ大陸、メキシコに住む草創期のスペイン人の出自である家族」を指しており、『フランス・アカデミー辞典』第4版(1762年)の記述と考え合わせると、この時期における *créole* という語が意味する地理的対象が「アメリカ大陸」であることが概略的につかめるのである。

Walther von Wartburgの『フランス語語源辞典』*Französisches Etymologisches Wörterbuch* [= FEW] (“*creare*”の項目)の記述が非常に有益なのでここに示しておく。¹¹⁾

8) *L'Encyclopédie de Diderot et d'Alembert sur CD-ROM PC*.

9) フランス・アカデミーの辞典のような国民的な辞典は、単なる語彙の登録だけではなく、規範性が要求される。筆者の師であり、『広辞苑』の全項目にわたり入念に目配りした新村猛は生前、全生活のほとんど全てを費やして同辞典の改訂に取り組んでいた。大部な「ゲラ刷」を前にして辞典の登録性と規範性について筆者に語る姿がとても懐かしく想起される。国民的財産と言っても過言ではないこれらの辞典の将来をどのようにするのかは我々に与えられた課題なのであろう。

10) *L'Encyclopédie de Diderot et d'Alembert sur CD-ROM PC*.

creare erschaffen, erzeugen.

I. Afr. mfr. *crier* v. a. „faire (qch) de rien, tirer du néant (en parlant de Dieu)“ (1120—1572, Gdf; TL; SJeanEv) [. . .]

II. 1. [. . .]

2. Mfr. *crolo* „espagnol ou portugais de pure race blanche, né aux colonies“ (1598), nfr. *criollo* (1666), *criole* (Rich 1680—Trév 1704), *créole* (Trév 1732—1752); nfr. *creolle* „personne de n'importe quelle nationalité de pure race blanche, née aux colonies“ (1693), *creol* (1705), *creole* (1716), *créole* (seit Trév 1732); nant. *criole* f. „femme de mauvaise vie“ . Ablt. und zuss. Nfr. *negre creolle* ²⁾ „nègre né aux colonies“ (1724), *negre creol* (1733), *nègre créole* (seit Lar 1869); nfr. *créolisé, -ée* „habitué aux colonies“ (seit Boiste 1803); nfr. *créoliser* „adopter les mœurs des créoles“ (seit Besch 1845); nfr. *créolerie* „lieu habité par les créoles“ (fam., seit Lar 1869); nfr. *créolement* „à la manière des créoles“ (seit Lar 1929). — Gam; Boulan 69. — Übertragen Nfr. *créole* „français corrompu que parlent les noirs des colonies et les créoles dans leurs rapports avec les noirs“ (seit Lar 1869). Brunot 8, 1127—1130; König.

[. . .] Aus dem gleichen grund entstand im pg. die ablt. *crioulo* „der im hause geborene und aufgewachsene neger“. Dieses subst. drang auch in die andern europäischen sprachen, so oben II 2. [. . .] ML 2305.

11) Walther v. Wartburg, *Französisches Etymologisches Wörterbuch. Eine darstellung des galloromanischen sprachschatzes*, Bd. II (2. Halbband), Basel : Zbinden, photomechanischer nachdruck, 1971, S. 1296a-97a.

Oscar BlochとWalther von Wartburgの『フランス語源辞典』では次のような記述になっている。(Oscar Bloch / Walther von Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Paris : Presses Universitaires de France, sixième édition, 1975, p. 168b)

CRÉOLE, 1680. Antér. *criole*, 1676. Empr. de l'esp. *criollo*, qui est empr. du port. *crioulo*, de sens variés, «métis, nègre né au Brésil, serviteur qui est dans une maison depuis son enfance (en parlant de l'Inde), etc.» ; attesté en anc. port. au sens de «né dans la maison (en parlant de poules, par opposition à des poules achetées) » ; dér. de *criar* «nourrir, élever», lat. *creāre*, avec un suff. peu clair.

12) “Crier, créer” — Adolf Tobler / Erhard Lommatzsch, *Altfranzösisches Wörterbuch*, Bd. II (14. Lieferung), Wiesbaden : Steiner, 1931 (Neudruck, 1956), Sp. 1056-57.

12 bis) Créoleに関連したスペイン語またはポルトガル語に近い語形に関してAlain Rey et al. 『フランス語歴史辞典』 [= DictHist] は次のように記述している。(Alain Rey et al., *Dictionnaire historique de la langue française* [. . .], Paris : Le Robert, 1992, p. 526b)

CRÉOLE n. et adj., d'abord attesté sous les formes hispanisantes *crolo* (1598), *criollo* (1643), puis francisé en *créole* (1670), est emprunté à l'espagnol *criollo* (1590), lui-même emprunté au portugais *crioulo*, seulement attesté en 1632 au sens de «métis noir né au Brésil» mais dont le sens originel a dû être celui de «serviteur élevé dans la maison de son maître» (xvii^e s.). Ce mot est dérivé, avec un suffixe mal éclairci, de *cria*, dérivé régressif de *criar* «élever» (espagnol *criar*), issu du latin *creare*.

Le mot, d'abord appliqué à un Espagnol de race blanche né aux colonies, désigne une personne de race blanche née aux Îles (1670), mais à l'île Maurice s'applique au contraire à une personne de couleur. L'expression *langue créole* (1688), repris au xix^e s., est probablement un emprunt direct au portugais, à en juger par la localisation de la première attestation relative au créole portugais alors parlé au Sénégal.

Trésor de la langue française [=TLF] では上記の各語形の語源語誌に関するより詳細な情報を与えている。(Trésor de la langue française. *Dictionnaire de la langue du XIX^e et du XX^e siècle (1789-1960)*, publié sous la direction de Paul Imbs, t. VI, Paris : CNRS, 1978, p. 459b) ↗

2) In adjektivischer verwendung dient demnach das wort, durchaus im gegensatz zu seiner ursprünglichen nominalen verwendung, (ausschliesslich?) zur bezeichnung von farbigen; und zwar unterscheidet man durch diesen zusatz einen in den kolonien geborenen neger von einem solchen, der erst nach seiner geburt dorthin gelangte (Lar). Von hier aus konnte *créole* in einer neuen nominalen, wohl durch ellipse aus *langue créole* entstandenen verwendung, auch die bed. 2 „verderbtes neger-französisch“ erlangen.

フランス語*créole*はラテン語 *creare* を継承した中世フランス語 *crier*¹²⁾ とは明らかに異なる変化をした語形であると筆者は思うが、このことを留保しても*créole*の古形として*crolo* という極めてスペイン語形またはポルトガル語形に近い語が1598年に記録されており、その語義は「植民地生まれの純粋な白色人種のスペイン人またはポルトガル人」である。多くの辞典（語源や語誌に関するものを含む）において挙げられているこの*crolo*という語を以って現代語*créole*の初出例とするのは派生系統を異にする可能性が高いので好ましくないと筆者は考える。^{12 bis)} (FEWにおける *mfr.* = mittelfranzösisch とは “Die im anfang des 17. jh. erschienenen wörterbücher, wie Cotgr, Voulz, Cresp usw., repräsentieren größtenteils noch den wortschatz des 16. jh., auf jeden fall den der vorklassischen zeit. Die ihnen entnommenen materialien bezeichne ich [=W. v. W.] daher meist noch als *mfr.*, ausgenommen die wörter, welche bei ihnen zuerst verzeichnet sind und daher im wesentlichen dem *nfr.* angehören”¹³⁾ であり, *nfr.* = neufanzösisch とは “seit 1600; wenn bei den einzelnen formen und bed. keine chronologische angabe steht, so sind sie seit beginn des *nfr.* belegt”¹⁴⁾ である。) FEWによると1666年には*criolo* が、そして17世紀の終わり頃から18世紀

↘ **Étymol. et Hist. I.** 1598 *crolo* «espagnol de pure race blanche né aux colonies» (*Hist. nat. et mor. des Indes de J. de Acosta*, trad. de l'esp. par R. Regnault Cauxois, fol. 176 b ds KÖNIG, p. 85) ; 1643 *criollo* «*id.*» (*Du Chocolate*, par A. Colmenero de Ledesma, trad. de l'esp. par R. Moreau, p. 6 ds ARV., p. 205) [ces 2 attest. présentent le mot comme esp.] ; 1670 *créole* «personne de pure race blanche née aux colonies» (*Lettre de M. de Baas, Gouverneur des Antilles, à Colbert*, 10 nov., *ibid.*). **II.** 1688 *langue créole* «portugais corrompu parlé au Sénégal» (M. J. DE LA COURBE, *Premier voyage ... fait à la coste d'Afrique en 1685*, p. 192 ds ARV., p. 208) ; 1826 *patois créole* «français corrompu parlé dans les colonies» (HUGO, *Bug-Jargal*, p. 106). I empr. à l'esp. *criollo* «*id.*», attesté dep. 1590 (Acosta, original de la trad. citée *supra* ds FRIED.), lui même empr. au port. *crioulo* «noir né dans les colonies», qui n'est attesté que dep. 1632, mais dont le sens originel, plus archaïque, semble être «serviteur élevé dans la maison de son maître» (XVII^e s. ds DALG.), dér. de *cria* «*id.*», dér. régressif de *criar* «élever, etc.» (cf. esp. *criar*, s. v. *créat*). II est prob. un empr. direct au port., en raison du sens et de la localisation de la 1^{re} attest. (v. ARV., pp. 204-208).

他に例えば、Albert Dauzatの『フランス語語源辞典』(Albert Dauzat, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Paris : Larousse, dixième éd., 1954, p. 218b)でも*créole*の初出例として“*crolo*, 1598, Acosta”を挙げているが、同時に記載している“*criole*, 1690, Furetière”の方が直系の語である。同語源辞典の全面改訂版ではFuretièreの用例を廃して1676年の*criole*を引いているにもかかわらず、1598年の*crolo*はそのままである。(Albert Dauzat / Jean Dubois / Henri Mitterand, *Nouveau dictionnaire étymologique et historique*, Paris : Larousse, 1964 (éd. de 1977), p. 210b)

13) FEW, Beiheft, Ortsnamenregister — Literaturverzeichnis — Übersichtskarte, Tübingen : Mohr, zweite Auflage, 1950, S. 35b.

14) Ebd., S. 39b.

初めにかけてPierre Richeletの辞典1680年初版や『仏羅辞典』(Trévoux) 1704年初版にcriole という語形が見られるという。(前記, Furetièreの辞典(1690年)やCorneilleの辞典(1694年)におけるcriole参照。)改訂版の『仏羅辞典』(Trévoux, 1732—1752)には現在と同じ語形 créole が記載されている。(この頃がcrioleからcréoleへの語形変化の時期と考えられる。^{14 bis}) またFEWではNantesのフランス語方言を挙げ、「娼婦」の意味のcriole(女性名詞としてのみ用いる)を記述しているが、これは氷山の一角であろうと推測される。

形容詞として用いて, negre creolle (1724年), negre creol (1733年)で「植民地生まれの黒人[この表現ですら筆者としては不本意であるが, 原語はより軽蔑的な表現である¹⁵]」の意味となり, 『19世紀ラルース辞典』 *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle* [= Lar. du XIX^e s.] ([t. V], 1869)にnègre créole¹⁶が記載されているとしている。Wartburg自身の注記にもあるように形容詞の用法は元の名詞の意味(「白色人種」とは全く反対に「有色人種」という意味で使われており, これにより「植民地で生まれた黒色人種」が区別されるようになる。そしてここからlangue créoleの省略により名詞の用法が生まれ, 『19世紀ラルース辞典』が記述する「植民地の黒色人種や黒色人種と関係のあるクレオール人が話すフランス語」¹⁷への転用が生じ, “verderbtes Neger-Französisch”「墮落したネグロ・フランス語」(Wartburgの表現をそのまま翻訳したが, ドイツ語表記は筆者が修正した)が誕生するとしている。

『19世紀ラルース辞典』におけるcréoleの各品詞の語義等と用例(必要箇所のみ。ただし, 1例のみ全文)を示しておく。¹⁸ まず名詞では“Personne née dans les colonies américaines de parents étrangers à l’Amérique”であり, 用例としてはles créoles blancs, les passions des créoles, Les créoles espagnols, comme aujourd’hui les hommes de couleur, étaient autrefois traités avec mépris

14 bis) 『仏羅辞典』(Trévoux, 1743/52)には“criole”と“créole”の両方の項目があり, 当時では, もはや前者よりも後者の方が一般的であったことが判る。(Le Grand Atelier historique de la langue française. 14 grands dictionnaires de la langue française sur CD-ROM PC)

CRIOLE, s. m. Terme de Relations. C’est un nom que les Espagnols donnent à leurs enfans qui sont nés aux Indes. Les Espagnols qui viennent d’Espagne sont grands ennemis des Crioles, & empêchent qu’ils ne parviennent aux charges. Voyez Hornius, Orb. Polit. On dit aussi ordinairement en François Créole que Criole.

CRÉOLE. Voyez CRIOLE. Nous disons néanmoins aussi ordinairement Créole que Criole.

また, 18世紀中葉のPierre Richeletの辞典*Dictionnaire de la langue française ancienne et moderne*の「新版」(1759年)には次のように両形が見出し語として立てられている。(Pierre Richelet, *Dictionnaire de la langue française ancienne et moderne*, t. I, Lyon : Les Freres Duplain, nouvelle édition augmentée, 1759 (Kyoto : Rinsen, réimpression, 1987), p. 643a)

CRIOLE, ou CRÉOLE, s. m. Terme de Relation. Nom que les Espagnols donnent à leurs enfans qui sont nez aux Indes.

15) Hugo Schuchardtはレユニオン島のフランス語系クレオール語論文に対する批評で“nègre malgache”を“noir mozambique”に正している。(H. Schuchardt, “Sur le créole de la Réunion”, *Romania*, XI, 1882, p. 589, n. 2)

16) FEWの引用のまま。Lar. du XIX^e s.では“Négresse créole”。(Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, t. V, Paris : Administration du Grand dictionnaire universel, 1869, p. 490c)

17) FEWの引用をそのまま翻訳。Lar. du XIX^e s.では“Français corrompu que parlent les habitants des colonies françaises d’Amérique anciennes ou actuelles”。(Lar. du XIX^e s., V, p. 490c)

18) *Ibid.*

par les Espagnols venus d'Europe, 形容詞では“Qui est né en Amérique d'individus étrangers à ce pays”, “Se dit quelquefois des nègres nés en Amérique”あるいは“Qui est propre aux créoles”で、1番めの用例はles femmes créoles, 2番めの用例はnègresse créole, 3番めのはle parler créole, 拡張として“Provenant des colonies”で用例はle poulet créole, 言語学用語としては先述したので省略し、他の専門用語もここでは割愛する。

同辞典の百科事項欄¹⁹⁾の最初のごく一部を次に抄録しておく。²⁰⁾

On donne généralement le nom de *créole* à un individu de race blanche qui est né sur le continent américain ou dans les Antilles ; mais ce mot désigne plus particulièrement les personnes qui, descendant d'une race blanche, sont nées sous les tropiques, à la Louisiane, à la Guyane, aux Antilles, au Brésil et aussi à l'île Maurice et à la Réunion. Les *créoles*, dans les anciennes colonies de l'Espagne du continent américain, formaient la seconde classe des citoyens.

同辞典では前出の『フランス・アカデミー辞典』における第7版以前の意味が「一般的な」百科的語義として、そして20世紀前半の第8版の意味が「特別な」百科的語義として与えられており、語の意味の変遷を垣間見ることができて興味深い。

1970年代初期の『ラルース・フランス語辞典』*Grand Larousse de la langue française* (1972)では、“créole”の項目は“n. et adj.”という品詞表示に続き、“(esp. *criollo*, issu lui-même du portug. *crioulo*, métis, Noir né au Brésil, serviteur qui est dans une maison depuis son enfance [en parlant de l'Inde], etc., de *criar*, nourrir, élever, lui-même issu du lat. *creare* [v. CRÉER] avec un suffixe obscur ; 1670, Colbert)”という語源情報の次に“Se dit d'une personne de race blanche née dans les plus anciennes colonies européennes d'outre-mer (Antilles, Réunion, etc.)”, さらにune chanson créoleのような“Relatif aux créoles”の形容詞用法, “Langue parlée par les Noirs de l'Amérique et des îles de l'océan Indien, formée de français, d'espagnol, de portugais, etc., et de mots indigènes”という男性名詞の用法が挙げられている。²¹⁾

フランスの国家的事業としてPaul Imbsが編集指揮をした『フランス語宝典』*Trésor de la langue française* [= TLF]の“créole”の項目を抄録すると次のようになる。(用例は省略する。)²²⁾

CRÉOLE, adj. et subst.

A. — 1. (Personne) qui est de race blanche, d'ascendance européenne, originaire des plus

19) 『19世紀ラルース辞典』の記述は多彩な上に濃密であり、やはりこの類の辞典の最高峰と言えるであろう。趣旨が異なるため単純に比較するのは無理があるが、言語（特に語源や古語）辞典における記述の範とされるFEWですら知性の香り高さでは『19世紀ラルース辞典』に遥か及ばない。後者には百科事項に関する記述があり、18世紀から19世紀前半にかけての人文知識の重みを感じる。

『広辞苑』の第4版刊行に向けての改訂作業に筆者が微力ながら関与していた当時を振り返れば、同辞典は百科項目と語彙項目に分かれており、「広辞苑用箋」と銘の入ったA5判231字詰専用原稿用紙の欄外右端にある品詞等を記入する箇所の筆頭に、例えば、百科項目ならば[百]と記入したものである。『広辞苑』はフランス・アカデミー辞典のように国語の規範性を備えているとともに『百科全書』や『19世紀ラルース辞典』のように百科知識をも我々に与えてくれていたのであった。

20) Lar. du XIX^e s., V, p. 490c.

21) *Grand Larousse de la langue française en six volumes*, t. II, Paris : Larousse, 1972, p. 1055a.

22) TLF, VI, pp. 459b-60a.

anciennes colonies d'outre-mer.

— *P. ext. Nègre, noir créole*. Né dans les colonies (et non en Afrique).

2. Spéc., ETHNOGRAPHIE, LING. (Manière) propre aux créoles.

Rem. 1. La notion de *créole* a évolué avec les connaissances linguistiques ; d'abord péj. (*cf.* étymol. et hist.), le mot désigne aujourd'hui un système linguistique autonome, d'origine mixte, issu du contact d'une langue européenne avec des langues indigènes ou importées (Antilles), devenu langue maternelle et langue principale d'une communauté (p. oppos. à *pidgin* et à *sabir*).

2. [. . .]

B. — (Celui ou celle) qui a le tempérament propre aux créoles ou semblable à celui des créoles, caractérisé essentiellement par l'indolence et la grâce.

注記において「自律した言語体系」と明示され、ヨーロッパの言語と土着の、あるいはアンティル諸島においては外から導入された言語との混成を起源とし、「母語」であることが明記されている。(「母語」に関する記述はこのTLFの方が『フランス・アカデミー辞典』第9版よりも時期的に早い。)

『ロベール・フランス語辞典』*Le Grand Robert de la langue française* (1985) [=Rob.] の“*créole*”の項目において品詞は“adj. et n.”となっており、他の辞典と同様な語源記述の後に、“1. Qui se rapporte aux personnes de race blanche, nées dans les colonies intertropicales (en particulier aux Antilles)”とあり、“En français de l'île Maurice, *créole* désigne au contraire une personne de couleur”と注記されている。続いて“2. Relatif aux pays de la zone tropicale caractérisés par la colonisation blanche et l'esclavage noir (à l'origine)”という記述と並んで次に掲げる言語学用語としての記述が見られる。²³⁾

3. (XIX^e ; une première fois en 1668, *langue créole*, à propos d'un créole portugais d'Afrique). N. m. Ling. *Le créole, un créole*. Système linguistique mixte provenant du contact du français, de l'espagnol, du portugais, de l'anglais ou du néerlandais avec des langues africaines indigènes ou importées (Antilles) et devenu langue maternelle d'une communauté (opposé à *pidgin** et à *sabir**, qui ne sont pas des langues maternelles). [. . .]

Adj. *Locutions créoles. Vocabulaire, dictionnaire créole.*

REM. La reconnaissance du créole comme véritable langue est relativement récente ; ces parlers

23) *Le Grand Robert de la langue française. Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française de Paul Robert*, revue et enrichie par Alain Rey, t. III, Paris : Le Robert, deuxième édition, 1985, pp. 31b-32a.

24) Émile Littréの辞典の“*créole*”の項は特に見るべき記述はないが、他の辞典とはやや趣が異なるので、参考のためここに品詞と語義の箇所のみを記しておく。“s. m. et f. 1^o Homme blanc, femme blanche originaire des colonies”, “Adj. Une femme créole”, (“Nègre créole, nègre né aux colonies, par opposition au nègre qui provient de la traite”), “2^o Espèce de coquille du genre Vénus”, “R. Les dictionnaires de Furetière et de Richelet ont *criole*”, “E. Ital. *creolo* [] ; de l'espagn. *criollo*. L'origine de *criollo* est douteuse ; si on le fait venir de l'espagn. *criar*, élever, nourrir, la formation est tout à fait irrégulière ; d'autres prétendent que c'est un mot caraïbe ; l'Académie espagnole dit que c'est un mot inventé par les conquérants des Indes occidentales et transmis par eux.” (Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, t. II, [Paris] : Gallimard / Hachette, 1971, pp. 1110-11) ちなみにこの記述は1872年版と同じである。(1872年版は*Le Grand Atelier historique de la langue française. 14 grands dictionnaires de la langue française sur CD-ROM PC*)

étaient conçus, jusqu'à la fin du XIX^e s., comme de simples altérations du français, de l'anglais, etc., ce qui n'est vrai que de leurs lexiques. Hugo, dans *Bug-Jargal* (1826), parle de *jargon*, de *patois créole*.

この辞典で言語体系に関する記述, 「土着の言語との混成」の箇所での「アンティル諸島は外から導入された言語との混成」であるという記述および母語に関する記述等がTLFと同様であるのは興ざめである。Rob. の「正当な言語としてのクレオール語の承認は比較的, 最近のことである」という注記は裏返せば辞典執筆時では既にクレオール語が「正当な言語」として認められていたことを示している。²⁴⁾

1.2. スペイン語圏での「クレオール」

ここまでフランス語でのcréoleを見てきたが, 以下ではこの語の語源とされるスペイン語, さらに次節でポルトガル語の相等語を簡単に一瞥しておきたい。

フランス語créoleの直接の語源とされるスペイン語criolloに関してはJoan Corominas (Corominas) およびJosé A. Pascual の『カスティーリャ語・イスパニア語語源辞典』*Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico* [= DECH. 全6巻] の該当項目を抄録すると次のようになっている。²⁵⁾

CRIOLLO, adaptación del port. *crioulo* 'el esclavo que nace en casa de su señor', 'el negro nacido en las colonias, a distinción del procedente de la trata', 'blanco nacido en las colonias', derivado de *criar*, el sufijo ofrece dificultades, pero es verosímil que se trate de un mero diminutivo portugués de *cria* 'esclavo criado en casa del señor'. *I.^a doc.*: 1590, P. J. de Acosta.

この語のスペイン語初出例は, “P. J. de Acosta”による1590年のもので, FEW, TLF, Rey et al. によるDictHist等でフランス語の初出例等として挙げられた語に対応する本来のスペイン語例であり, 他にも言語を問わず多くの辞典の語源・語誌で取り上げられているので, ここで簡単に説明しておきたい。これは後述する18世紀前半に出版された『カスティーリャ語辞典』*Diccionario de la lengua castellana* (1726-39)いわゆる『(引証された典拠による)権威付けの辞典』*Diccionario de autoridades* [= *Aut.*]における項目“criollo”の出典として登場する資料でJoseph de Acosta神父による*Historia natural y moral de Indias*のことである。

Corominasのスペイン語語源辞典には上記DECH以外に1巻本の*Breve diccionario etimológico de la lengua castellana* [= BDEC]もあり, こちらの記述の方が各語義間のつながりが判りやすいため, 改めて示しておく。²⁶⁾

25) Joan Corominas / José A. Pascual, *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*, volumen II, Madrid : Gredos, 1980 (4.^a reimpresión, 1996), págs. 243b-45b.

26) Joan Corominas, *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*, Madrid : Gredos, tercera ed., 1973 (2.^a reimpresión, 1980), pág. 178b. この辞典はDECHの単なる簡約版ではない。この点に関しては専門家でも多くの誤解があり, 例えば小林英夫は不当にも「抄本」とわざわざ記している。(小林英夫「語源学のたのしみ」小林(編)『私の辞書』丸善, 1973年(5刷, 1981年), 37頁)

CRIOLLO, 1590. Adaptación del port. *crioulo* 'blanco nacido en las colonias': significó primeramente 'esclavo que nace en casa de su señor' y 'negro nacido en las colonias (a distinción del procedente de la trata)' y en consecuencia, es deriv. de *criar*. Sólo la terminación ofrece dificultades pero es verosímil que se trate de un deriv. de *cria* 'esclavo criado en casa de su señor' con el sufijo diminutivo portugués *-oulo* (adaptado después al cast. según el modelo del cast. *-illo* = port. *-elo*).

すなわちスペイン語criolloはポルトガル語crioulo「植民地で生まれた白色人種」から来たもので、「主人の家で生まれた奴隷」から「(人身売買と区別して) 植民地で生まれた黒色人種」を意味するようになったのである。

スペインのアカデミアから刊行された二つの辞典の該当項目を示しておきたい。一つは前述の18世紀前半に出版されたアカデミアによる最初の辞典である『カスティーリャ語辞典』*Aut.*で、²⁷⁾ もう一つは20世紀半ばの1947年に刊行された『スペイン語辞典』*Diccionario de la lengua española* [= DRAE]の第17版である。²⁸⁾

CRIOLLO s. m. El que nace en Indias de Padres Españoles, ù de otra Nación que no sean Indios. Es voz inventada de los Españoles Conquistadores de las Indias y comunicada por ellos en España. Lat. *Patria Indus, genere Hispanus*. ACOST. Hist. Ind. lib. 4. cap. 25. Esta fruta decían algúnos *Criollos* (como allá llaman à los nacidos de Españoles en Indias) que excedía à todas las frutas de España. Ov. Hist. Chil. pl. 380. Uno de los seis era Alemán mestizo de Santiago y *Criollo*. [. . .] (*Aut.*)

Criollo, Ila. (DE *criar.*) adj. Dicese del hijo de padres europeos, nacido en cualquiera otra parte del mundo. Ú. t. c. s. [= Úsase también como sustantivo] || **2.** Aplicase al negro nacido en América, por oposición al que ha sido traído de África. Ú. t. c. s. || **3.** Dicese de los americanos descendientes de europeos. Ú. t. c. s. || **4. V. Cambur criollo.** || **5.** Aplicase a la cosa o costumbre propia de los países americanos. *Manjar CRIOLLO.* (DRAE)

18世紀では「スペイン人の両親から、またはインディオではない他の民族からインディアス [フランス語のIndesに対応] で生まれた者」であり、20世紀では地域を特定せずに「ヨーロッパ系の両親から他国で生まれた者」を示し、さらに「アフリカから連れてこられた者に対して

27) Real Academia Española, *Diccionario de la Lengua Castellana* [llamado de autoridades], t. II, Madrid : Francisco del Hierro, 1729 (t. I, Madrid : Gredos, reimpresión, 1984), pág. 661a.

同書第1巻の序文に次のようにある：“El principal fin [. . .] 3 Como basa y fundamento de este Diccionario, se han puesto los Autóres que ha parecido à la Academia han tratado la Lengua Española con la mayor propiedad y elegancia : conociendose por ellos su buen juicio, claridad y proporción, con cuyas autoridades están afianzadas las voces, y aun algunas, que por no practicadas se ignóra la noticia de ellas, y las que no están en uso, pues aunque son próprias de la Lengua Española, el olvido y mudanza de términos y voces, con la variedad de los tiempos, las ha hecho yá incultas y despreciables : [. . .]” (*ibid.*, t. I, 1726, págs. I-II)

28) Real Academia Española, *Diccionario de la lengua española*, Madrid : Espasa-Calpe, décimoséptima [sic] ed., 1947, pág. 368c.

アメリカ大陸で生まれた黒色人種」や「ヨーロッパ系の血を引くアメリカ大陸の者」をも表している。また、*Aut.*にはインディアスのスペイン人征服者(コンキスタドル)によって創り出された語であると記されていることに注目したい。

ここで『19世紀ラルース辞典』冒頭にあるスペインのアカデミア辞典に依拠した次のような語源解説にも注目しておきたい。^{28 bis)}

CRÉOLE s. ([. . .] — de l'espagn. *criollo*, dont l'origine est douteuse. Si on le fait venir de *criar*, élever, nourrir, la formation est tout à fait irrégulière. D'autres prétendent que c'est là un mot caraïbe. L'Académie espagnole dit que c'est un mot inventé par les conquérants des Indes occidentales et transmis par eux).

1.3. ポルトガル語圏での「クレオール」

上記のスペイン語*criollo*はポルトガル語からの借用語とされているので、本節ではポルトガル語*crioulo*を簡単に見てみることにする。Antônio Geraldo da Cunhaは『ノヴァ・フロンテイラ社ポルトガル語語源辞典』*Dicionário etimológico Nova Fronteira da língua portuguesa*の“*criar*”の項目で次のように記述している。²⁹⁾

crioulo *adj. sm.* ‘cria, escravo’ ‘ext. negro nascido na América’ xvii. De *cria*, deverbal de *criar*, com uma terminação difícil de explicar.

ポルトガル語*crioulo*は拡張された語義として「アメリカ大陸で生まれた黒色人種」となり、「17世紀」から文献資料に見られ、興味深いのは「説明が難しい語尾を伴う」ことである。

José Pedro Machadoの『ポルトガル語語源辞典』*Dicionário etimológico da língua portuguesa*では次のように説明している。³⁰⁾

Crioulo, s. De *criar* + *-olo*, (< lat. *-ollu-*); [. . .] Séc. xvii: «Chegou da Igreja do Caes hum Clerigo, que disse ser dos Christãos de S. Thomé; e fora *crioulo* do P. Reytor da Igreja de S. João», P. Fernão de Queirós, *Conquista de Ceilão*, p. 561.

用例を17世紀のP. Fernão de Queirósの『セイロンの征服』*Conquista de Ceilão*から採り、語

28 bis) Lar. du XIX^e s., V, p. 490c. 他にも Adolphe Hatzfeld et Arsène Darmesteter の辞典では“**CRÉOLE** [. . .] s. m. et f. [ÉTYM. Emprunté de l'espagn. *criollo*, m. s. d'origine incertaine” としている。(Adolphe Hatzfeld / Arsène Darmesteter, avec le concours de Antoine Thomas, *Dictionnaire général de la langue française du commencement du XVII^e siècle jusqu'à nos jours*, t. I, Paris : Delagrave, réimpression intégrale, 1964, p. 588b)

29) Antônio Geraldo da Cunha, *Dicionário etimológico Nova Fronteira da língua portuguesa*, Rio de Janeiro : Nova Fronteira, 2.^a edição revista e acrescida de um suplemento, 1982 (2.^a impressão, 1987), p. 227b.

30) José Pedro Machado, *Dicionário etimológico da língua portuguesa com a mais antiga documentação escrita e conhecida de muitos dos vocábulos estudados*, volume II, Lisboa : Horizonte, terceira ed., 1977, p. 253a.

源をcriar「創る，育てる，教育する，飼育する，栽培する」(の変化形)に接尾辞-oloが付いたものとしている。前出のCorominas y PascualのDECHはこの接辞に問題があるとして、Hugo Schuchardtの「criouloはその語尾の起源に関して明瞭でない」という言葉を引用している。³¹⁾

Todo el mundo está de acuerdo en que esta palabra nació en portugués y en que es derivada de *criar*; sólo el sufijo presenta un problema: ya Schuchardt en 1889 (*ZRPPh*, XIII, 484n.1) escribía: «*crioulo* ist nur bezüglich der Herkunft seiner Endung dunkel»

インドのポルトガル語系クレオール語を論じた論文であるSchuchardtの原典から引用された当該箇所はポルトガル語criouloのみではなく、スペイン語criolloも同時に問題としており、多少長くなるが、DECHが引用した部分の前段およびSchuchardtによるJ. M. Macías *Diccionario cubano*からの貴重な引用も含めて以下にSchuchardtの原典から当該箇所を記しておく。³²⁾

Also das ist keine missbräuchliche und nicht einmal eine abgeleitete Anwendung des Wortes, wie Manche anzunehmen scheinen. Man ist auch nach der anderen Seite hin zu weit gegangen wenn man als ursprüngliche Bedeutung des span. *criollo* die von „Kreolneger“ angesehen hat. Selbst eine dreihundertjährige Autorität wie die Garcilaso de la Vega (el Inca)'s kann ich hier nicht gelten lassen. J. M. Macías *Diccionario cubano* (Coatepec 1888) S. 386 führt aus dessen Coment. Reales an: “Es nombre que inventaron los negros, y así lo muestra la obra. Quiere decir entre los negros, *nascido en Indias*; inventáronlo para diferenciar los que van de acá, nascidos en Guinea, de los que nascen allá, porque se tienen por más honrrados y de más calidad por haber nascido en su patria, que no sus hijos, porque nascieron en la ajena, y los padres se ofenden, si les llaman *criollos*. Los españoles, por la semejanza, han introducido este nombre en su lenguaje, para nombrar los nascidos allá.” Das Wort *criollo*, *crioulo* ist nur bezüglich der Herkunft seiner Endung dunkel.

その他、特にポルトガルやブラジルの学者はポルトガル語criouloの語源をいくつか提案しており、例えばCarolina Michaëlis de Vasconcelosは“Infelizmente, não há todavia autor algum, quinhentista, que empregasse o vocabulo *criôlo*, *crioulo*, *crioilo* ou o castelhano *criollo*. [sic] Por isso os etimologistas estrangeiros dão-nos como de origem desconhecida, e os próprios Peninsulares não sabem decidir, se o primeiro que o formou, ou que o aplicou a negros, ou aos falares de negros, foi Português ou Espanhol”としながら、まずポルトガルにおいて接尾辞-oilo, -oila (スペイン語の-ueloに対応)による派生およびcriarの通俗的な派生が生じ、スペイン語地域ではpimpolloの類

31) DECH, II, pág. 243b.

32) H. Schuchardt, “Beiträge zur Kenntnis des kreolischen Romanisch, V, Allgemeineres über das Indoportugiesische (Asiportugiesische)”, *Zeitschrift für romanische Philologie*, XIII, 1889, S. 484, Anm.1.

他に、Wilhelm Meyer-Lübkeは『ロマンス語語源辞典』*Romanisches etymologisches Wörterbuch*で“pg. *crioulo* (> sp. *criollo*, frz. *créole*) „der im Hause geborene Neger“”としているだけで接尾辞の問題には触れていない。(Wilhelm Meyer-Lübke, *Romanisches etymologisches Wörterbuch*, Heidelberg: Winter, 3. Aufl., 1935 (5. Aufl., 1972), Nr. 2305)

推によってcriolloがcrioiloに取って代わったと考えている。しかし、これも実証できず、定説に至っていない。³³⁾

ただ、筆者が推定して論断できるのは、15世紀にガリシア・ポルトガル語という単一言語から分岐したポルトガル語にはcriouloという語が存在するのに対し、もう一方の分岐（この関係を“codialectes (co-dialectos)”と言う）であるガリシア語にはこの語は存在せず、スペイン語からの借用語であるcriolloを使用している点から考えると、criouloという語はポルトガル語が独自に形成した語であると言える。旧大陸においてではなく新大陸において形成された、まさに大航海時代の産物なのである。ガリシア語の辞典の中ではEladio Rodríguez Gonzálezの辞典（のみ）にこの両語が載っているが、criouloの項目の方には「我々の地方（領域）では使用しない」と記されている。^{33 bis)}

CRIOLLO, LLA adj. y s. Criollo, dicese del hijo o hija de padres europeos, que han nacido fuera de Europa.

CRIOULO, LA adj. y s. En un Dic gallego figura esta voz portuguesa, que en nuestra región no tiene uso, empleándose, en cambio, comúnmente, la forma CRIOLLO, sin duda por la constante comunicación que desde muy antiguo hay entre Galicia y los países hispanoamericanos.

以上を総合すると、フランス語においても、スペイン語やポルトガル語においても「クレオール」という語の起源は明確ではなく、今ひとつヴェールに包まれている。その発展過程も地域によってさまざまである。本稿では新大陸の歴史的な叙述に深く立ち入らなかったので詳しくは述べないが、「クレオール」は新世界に入植し、奴隷制の元で大規模農園に関わった主従の人々によって創り出され、広まったことに大いに関係するのである。

33) Carolina Michaëlis de Vasconcelos, *Lições de filologia portuguesa, segundo as preleções feitas aos cursos de 1911/12 e de 1912/13, seguidas das Lições práticas de português arcaico*, Lisboa : DINALIVRO, reedição, [1976], pp. 219-20. 彼女はまた次のようにも言っている：“De aí passou a denominar, também no século XV, o escravo nada e criado em casa do senhor ; e depois de 1500 — o nascido nas Colónias, não proveniente do tráfico, não comprado — nascido nos continentes para onde haviam levado seus pais africanos.” (*ibid.*, p. 219)

スペイン語criolloあるいはポルトガル語criouloの語源に関しては次のような論考がある：Dieter Woll, “Esp. *criollo* y port. *crioulo* : volviendo a la cuestión del origen y la historia de las dos palabras”, in : Annegret Bollée / Johannes Kramer (hrsg.), *Latinitas et Romanitas. Festschrift für Hans Dieter Bork zum 65. Geburtstag*, Bonn : Romanistischer Verlag, 1997, S. 517-35. (ただし、筆者の手許に到着したばかりで詳細は未検討であるが、これら両語の時間的関連を追究した点が興味深い。)

33 bis) Eladio Rodríguez González, *Diccionario enciclopédico gallego-castellano*, tomo I, Vigo : Galaxia, 1958 (reimpresión, 2000), p. 677a. 筆者架蔵の他のガリシア語辞典を見てもこれらの語の項目はなく、Antón Santamarina (ed.), *Diccionario de dictionarios*, Edición en CD-ROM, Versión 2, Fundación Pedro Barrié da la Maza, [A Coruña], 2000 を調べた結果、ガリシア語辞典全17点のうちRodríguez Gonzálezの辞典を除けば、唯一、Leandro Carré Alvarellos, *Diccionario galego-castelán*, 5ª edición, 1979に“**Crioulo, la** adj. Criollo”とあるのみである。

ちなみに、ポルトガル語とガリシア語等の“codialectes (co-dialectos)”の関係に関しては、J. Leite de Vasconcelos, *Esquisse d'une dialectologie portugaise*, Paris / Lisboa : Aillaud, 1901, pp. 28-31 および拙稿“Algunhas consideracións sobre o sistema consonántico da lingua galega”, *Artes Liberales*, 75, 2004参照。

1.4. 英語圏での「クレオール」

最後に英語圏、具体的には大英帝国の版図における「クレオール」の概念を考察してみることにする。まず、『ブリタニカ百科事典』*Encyclopædia Britannica* [= EncBrit]を取り上げたい。他の言語圏の類書に比べて驚くことは1771年刊行の初版でも項目がないことである。³⁴⁾これが英語圏と他の言語圏との「クレオール」に対する視点の決定的な違いであり、アメリカ大陸北部に後にカナダおよびアメリカ合衆国となる植民地を領有し、他の地域とは異なった植民地の歴史を経たことと関連している。(ちなみにアメリカ合衆国南部のルイジアナ・クレオール語はフランス語を基体とするクレオール語であり、フランス植民地に由来するのである。)

EncBritの名著第9版には“creole”として項目があり、次のようになっている。³⁵⁾

CREOLE (Spanish, *Criollo*), is a term which primarily was used to denote an inhabitant of the Spanish colonies who was descended from the European settlers, as distinguished from the aborigines, the negroes, and mulattoes. It is now more loosely employed, the name being frequently applied to a native of the West Indies, whose descent is partly but not entirely European. A part of coloured population of Cuba are at times designated creole negroes, in contradistinction to those who were brought direct from Africa. The creole whites, owing to the enervating influence of the climate, are not a robust race, but exhibit an elegance of gait and a suppleness of joint that are rare among Europeans.

語義として挙げられているのは「当初は原住民，黒色人種，混血児と区別して，ヨーロッパ人移民の系統を引くスペイン植民地の住人」で、「今や[19世紀後半]西インド諸島の土着民」である。“Creole negro”と“creole white”が対比して用いられており、前者はアフリカから直接、連れてこられた者に対してキューバの有色住民の一部を指している。

EncBritの第9版から約100年経た20世紀後半のEncBrit, 1970年版では同項目の分量は5~6倍になっている。(ただし、ほとんどペルーのcriolloの社会的説明に費やされている)ここでは冒頭の一部を挙げておく。³⁶⁾

CREOLE (French *créole* ; Spanish *criollo*), a term used originally (16th century) to denote persons born in the West Indies of Spanish parents, as distinguished from immigrants direct from Spain, Negroes and Indians. It has come to be used by and with reference to descendants of non-Indian peoples born and settled in the West Indies and on the American continents in some areas of Spanish, Portuguese and French colonization. In the United States the term is used

34) *Encyclopædia Britannica ; or, A Dictionary of Arts and Sciences, Compiled upon a New Plan*, Vol. II, Edinburgh : Bell and MacFarquhar, 1771 (reprinted, s. d.). ちなみに日本では1970年代初頭の『世界大百科事典』(第3巻, 平凡社, 1972年(1973年版))でも「クレオール」の項目はない。

35) *The Encyclopædia Britannica. A Dictionary of Arts, Sciences, and General Literature*, Vol. VI, Edinburgh : Adam and Charles Black, 9th ed., 1877, p. 567b.

36) *Encyclopædia Britannica*, Vol. VI, Chicago / London / [. . .] : Encyclopædia Britannica, ed. of 1970, pp. 724b-25a.

chiefly to designate the French-speaking descendants of the early French and Spanish settlers in Louisiana. [...] The patois dialects founded on French and Spanish are referred to as Creole languages.

16世紀の元の語義として「スペインからの直接の移民, 黒色人種, インディオから区別してスペイン人の両親から西インド諸島で生まれた人」とやや正確さが増している。またアメリカ合衆国におけるルイジアナの状況が説明されている。そして“The concept Creole has undergone many modifications during the four centuries of cultural and social development and racial mixture in the new world”³⁷⁾と説明している。

最新版の2008年DVD版EncBritの冒頭は、次のようになっている。³⁸⁾

Creole

Spanish Criollo, French Créole, originally, in the 16th–18th century, any white person born in Spanish America of Spanish parents, as distinguished from an American resident who had been born in Spain. The term has since been used with various meanings, often conflicting or varying from region to region.

この段落に続いて“Spanish colonial America”, “West Indies”, “different parts of Latin America”と別れて詳述されており, “Louisiana in the United States”は“West Indies”の最後のところで説明されている。また, 言語に関する項目として“creole (linguistics)”が別に立てられている。(見出し語に続く原語の掲載順がスペイン語, フランス語の順になっている点がいささか気になる。EncBritの第9版におけるスペイン語原語のみの提示といい, EncBritの1970年版におけるペルーのcriolloの説明といい, EncBritの視線はスペイン語言語圏に向けられているのである。)

最後に『オックスフォード英語辞典』*The Oxford English Dictionary* [= OED] の初版 [= OED¹]³⁹⁾ と第2版 [= OED²]⁴⁰⁾ を比較しておくことにする。冒頭部分はOED¹とOED²とで同一である。

Creole [...] *sb., a.* Also 7–8 **criole**. [a. F. *créole*, ad. Sp. *criollo*, native to the locality, ‘country’; believed to be a colonial corruption of **criadillo*, dim. of *criado* ‘bred, brought up, reared, domestic’, pa. pple. of *criar* to breed, etc. : — L. *creāre* to CREATE. According to some 18th c. writers originally applied by S. American negroes to their own children born in America as distinguished from negroes freshly imported from Africa; but D’Acosta, 1590, applies it to Spaniards born in the W. Indies.]

37) *Ibid.*, p. 724b.

38) *Encyclopædia Britannica 2008 Ultimate Reference Suite* [DVD], Version 2008.02.00., Encyclopædia Britannica, Chicago, 2008.

39) *The Oxford English Dictionary, Being a Corrected Re-Issue with an Introduction, Supplement, and Bibliography of A New English Dictionary on Historical Principles*, Vol. II, Oxford: Clarendon, 1933 (reprinted, 1970), p. 1163b-c.

40) *The Oxford English Dictionary*, Vol. IV, Oxford: Clarendon, 2nd ed., 1989, p. 7b-c.

OED特有の言い回しであるが、creoleは17世紀から18世紀にかけてcrioleという語形も見られ、語源はラテン語creareに由来するcriarの過去分詞criadoの指小辞形*criadilloの植民地的転訛のスペイン語criolloから借用したフランス語créoleで、18世紀の著述家によると元々、南アメリカの黒色人種がアフリカから新たに持ち込んだ（これはOEDの表現をそのまま訳したもの）黒色人種と区別してアメリカ大陸で生まれた彼らの子供たちに用いたことによるという。しかし、D'Acostaは1590年に西インド諸島で生まれたスペイン人に用いたと記している。さらにOEDは旧版、新版ともに同一の記述で、上の引用文に続けて次のように記している。西インド諸島、アメリカ大陸の他の地域、モーリシャスにおいて、元はヨーロッパ出身の人（たいていスペイン人かフランス人）でもなくアフリカの黒色人種でもないその土地で生まれ育った人を指していた。この名称は膚の色は意味しておらず、一方でヨーロッパ（あるいはアフリカ）で生まれた人と、また他方で以前からの土着の人と区別する血統に関するものなのである。しかし、今やふつうは“creole white”と同じで、これらの植民地や地域で生まれ育ったヨーロッパ人移民の子孫を指し、あまり一般的ではないが“creole negro”の場合もあり、アフリカから新たに持ち込んだ（同上）黒色人種と区別して西インド諸島あるいはアメリカ大陸で生まれた黒色人種を言う。（ちなみにOED¹とOED²の違いは後者に新たに“a creolized language”の語義とその用例が付け加えられていることだけであり、他のOED¹の箇所はそのままOED²に引き継がれている。）

1.5. 「クレオール」とはいったい何か

Kisa ou ye menm ?⁴¹⁾ 「何者ぞ」

以上、見てきたように「クレオール」という語はポルトガル語、スペイン語、フランス語でほぼ時期を同じくして記録されていることと、それにも関わらず語源がいまひとつはっきりとしないこと等々の問題が明らかになってきた。語源が不確かであるということは一つには海の遙か向こうの新大陸での問題であるということと、もう一つにはこの語が大規模農園や奴隷制という閉鎖的な社会で使用されてきたことに関係しているのであろう。また、「クレオール」を日本では通例、「植民地で生まれた」という概念と結びつけて語られるが、上で見てきたように、ただ植民地で生まれただけでなく、「主人のもとで生まれた」者でなければ「クレオール」ではありえなかったのであり、よって「逃亡奴隷」の系統は当てはまらなかったという歴史も見逃してはならない。

さらに「クレオール」という語で表す対象の時代的な変遷はおろか、同時代的にも地域によって激しい違いがみとめられる。例えば、Rob.および同系列のDictHistではアンティル諸島とモーリス島（モーリシャス島）ではcréoleの意味が逆転することが指摘されている。

これに関する先駆的な興味深い研究であるRobert Chaudensonの論考はモーリス（モーリシャス）島、セイシェル諸島およびレユニオン島のクレオール語においてnwar [noir] 'noir'とblā [blan] 'blanc'という概念がkréol [Kréol] 'créole'とどのように関わってくるかという研究であり、次表のように地域によって同じ「クレオール」という語が表す対象が異なっていることが判る。⁴²⁾

41) Jòb 38 : 2. (CRL — BibleWorks, Version 5.0.) ちなみに、この構文は当クレオール語聖書中で「ルカ福音書」とならんで「ヨブ記」に異様に多く現れる。後者ではヨブの神への問いかけが、また前者ではマリアの問いかけや民衆のイエスに関する問いかけが多いからであろうか。

	MAURICIEN	SEYCHELLOIS	RÉUNIONNAIS
Blanc	—	+	+
Métis	+	+	+
Noir africain	+	+/-	+
Indien	—	—	—

「クレオール」は文化や民族の単なる接触の結果ではなく、大規模農園や奴隷制という条件のもとで形成されたものであり、そのように限定して解釈しなければその本質は見えてこないであろう。モーリシャス島をはじめセイシェル諸島やレユニオン島においてインド系住民（そして中国系住民）は決して「クレオール」ではないのである。

この条件下以外ではいくら多くの民族や文化が交差してもここでいう「クレオール」は生まれなかったのである。例えば、地中海のサルデーニャ島ではヌラーゲnuragheを建てた先住民の他に記録に残るものだけでもフェニキア、カルタゴ、ローマ、ヴァンダル、ビザンツ、サラセン、ピサ、ジェノヴァ、アラゴン、オーストリア、サヴォイア等が去来を繰り返したにも関わらず、クレオール文化が生まれるどころか、本来のサルデーニャ語はロマンス語の古い特徴を保持し、外来者が今でも自らの文化を維持して言語島を形成しているアルゲー（アルゲール）のような地域すら存在するのである。⁴³⁾ バルカン半島では多様な民族が共生してはいるものの決してクレオール化は起こらず、クレオール語も誕生しなかったのである。^{43 bis)}

「クレオール」の統一的な定義が困難なためでは決してなからうが、例えば文学等では「クレオール性」Créolitéという新たな概念を導入して、かつて大規模農園や奴隷制を経験し、「クレオール」を生み出した地域の人々が中心となって（その地域の人々が全て「クレオール」で

42) R. Chaudenson, “Le noir et le blanc : La classification raciale dans les parlers créoles de l’océan Indien”, *Revue de linguistique romane*, XXXVIII, 1974, p. 89. 音声表記で提示されているので角括弧内にレユニオン・クレオール語形を筆者が加えた。

43) サルデーニャの言語学的な状況に限って言えば、M[ax] L[eopold] Wagner, *La lingua sarda. Storia, spirito e forma*, Berna: Francke, 1951; Eduardo Blasco Ferrer, *Storia linguistica della Sardegna*, Tübingen: Niemeyer, 1984. また同島のAlguer (Alghero) におけるカタルーニャ語に関しては拙稿“Aproximació a l’estudi de la «llengua algueresa» — De la dialectologia catalana a la lingüística algueresa”, *Artes Liberales*, 69, 2001, pp. 1-24参照。

43 bis) 筆者はかつてアルバニアMoscopole (Voskopojë) のアルーマニア人の言語に関する論考をまとめたことがある。（「18世紀のMoscopoleにおけるアルーマニア方言」『ロマンス語研究』21号, 1988, 15-24頁）同拙稿の16頁でも引用したCostantino N. Burileanuの記録によると20世紀の初め、Moscopoleの全240戸のうち、約100戸がギリシャ正教徒のアルバニア人で、残りがルーマニア人であったにもかかわらず(C. N. Burileanu, *I Romeni di Albania*, Bologna: Andreoli, 1912, p. 129) 「クレオール」は生じなかった。

44) 例えば, “Ni Européens, ni Africains, ni Asiatiques, nous nous proclamons Créoles” (下記Bernabé et al., p. 13) で始まるJean Bernabé / Patrick Chamoiseau / Raphaël Confiant, *Éloge de la Créolité*, édition bilingue français / anglais (texte traduit par M. B. Taleb-Khyar), [Paris]: Gallimard, 1993. (原刊は1989年。元は1988年5月22日にフランスのセーヌ-サン-ドゥニ県で開催された第1回カリブ海フェスティヴァルでの講演) 彼らの「クレオール性」の歴史的な流れは次のとおりである: 「我々はそれ[グリッサンの「アンティル性」]をさらに一歩すすめて, «クレオール性»こそ«アンティル性»の核心にあるものだと提唱したわけです。エメ・セゼールのネグリチュードから, グリッサンの«アンティル性»を経て, 過去の歩みのいわば集大成を試みたのが, «クレオール性»です。」(ラファエル・コンフィアン / 聞き手・訳 = 恒川邦夫「«クレオール性»をめぐって——ラファエル・コンフィアンに聞く」『現代思想』25巻1号, 1997年1月, 88頁下段)

あるとは限らないにもかかわらず) 自分たちの「主体的な」アイデンティティの確立を目指そうとする一連の動きがある。⁴⁴⁾ しかし、「クレオール性」をはじめとして「アメリカ性」Américanité、「アンティル性」Antillanitéなどすべてが筆者の考える水準では定義されておらず、すべての術語が感覚的なのである。筆者が考える「定義されている」というのは学問的に真摯な議論をする上で共通基盤として使用される術語が研究者間で統一的に確認されている状態を指す。⁴⁵⁾ Bernabé, Chamoiseau et Confiantが提唱する「クレオール性」は主に文学を通じて人間を追究するもので我々を古い観念から解放する貴重な提言ではある。⁴⁶⁾ ただ、いったん、研究者間で理論的な議論が始められたならば諸々の術語に関する共通理解を促すことが研究に携わる者にとっては必要なのである。

他にも研究者が使用する「クレオール」およびこれに関連する用語は多くの場合、定義付けがなされておらず、概念が非常に曖昧である。⁴⁷⁾ また、多くの誤解や多様な解釈が生み出されている現在では「クレオール」は単なる文化接触や「混血」とは次元を異にすることを再確認した方がよいのではないだろうか。⁴⁸⁾

以上から判るとおり「クレオール」に関しては筆者の専門である言語学の領域を遥かに超えた種々多彩な領域において時代や場所を特定してはじめて有意な定義ができると筆者は考え

45) 「統一的に確認する」というのは、人文学の領域においては決して唯一の定義に収斂されることではないと筆者は考える。異なる理論を提唱する複数の研究者集団の間で同一名称で呼ばれる概念の相違を互いに理解したり、逆に同一概念を異なる名称で呼ぶ場合に相互の近似性を認識することである。

46) 彼らから始まり、広く人口に膾炙した「クレオール性」という概念は「思想的クレオリズム」(今福龍太『クレオール主義』青土社、新装版第2刷、1996年(元版1991年)、212頁)という言葉もあるように多分に観念的なのである。また、Carolyn Allenは主に文化論的な観点から「クレオール」の定義の問題を考察している。(Carolyn Allen, "Creole Then and Now: The Problem of Definition", *Caribbean Quarterly*, XLIV, 1-2, 1998, pp. 33-49) Allenが引用した見解の中で気になるのは「大陸部」「mainland」と「島嶼部」「island」に分けられるほど「環カリブ海地域」は単純ではなく、「島嶼部」でもハイチとドミニカは隣接しながらも異なり、マルチニクやグワドループもまた異なる点である。

47) 石塚道子の次の言葉にからうじて「奴隷制」が「クレオール」を定義する上で必要不可欠であることが意識されている:「カリブ海の島々の奴隷制プランテーション下に形成された社会と文化は、クレオール社会・文化と呼ばれ、中南米および北米大陸北部に形成された植民地社会・文化と区別されている。」(石塚道子「カリブ海地域におけるクレオール・アイデンティティ——終わりなき変容の道程を行く周辺人」黒田悦子(編著)『民族の出会いかたち』朝日新聞社、1994年、21-22頁)ただし、石塚は「クレオールとは混交という自らの本質によって、人種、民族、文化あるいは土着といった近代が作りあげてきた諸概念をことごとくあいまい化する存在である」(同書、37頁)と言うが、当事者から見れば曖昧な文化など存在するはずもなく、むしろ曖昧にしているのは研究者をはじめとする非当事者の側なのである。また、「人間が出会えば、そこには必ず形質的混交としての混血や文化的混交が生じ、混交によってお互いの差異はあいまいで不鮮明なものとなり、人間の区分標識としては役に立たないものとなる」(同書、21頁)というような言辭は「クレオール」に対する誤解を生む元凶になるだけである。「人間が出会」っても「混血」や「混交」が簡単には起こらないということは前述のバルカン半島の例を考えればすぐ判ることである。

48) 「経済のグローバリゼーションが進み、世界的に資本のみならず労働人口が移動する現代世界の文脈においては、すべての社会にクレオール化の萌芽があると言っているだろう」(恒川邦夫「アンティルの新しい文学をめぐって——「クレオール性(creolité / creoleness)礼賛」』『一橋大学言語文化』32号、1995年、116頁)というような発言から惹き起こされるあらゆる混交に対する「クレオール神話」を筆者は危惧するのである。

なお、西成彦が言う「このことば[「クレオール」]は、個々の人間の生誕の地を問題にはしても、原産地がどこであるかを問い詰める手続きを否定したところから始まっている」(西成彦『クレオール事始』紀伊國屋、1999年、15頁)という言葉も一瞬、震慄を覚えるが、覚醒の後、冷静に考えれば、「クレオール」の一面しか見ていないことに気付く。(管見ながら言語学究として筆者は同書を好著と考えていることも付け加えておく。)

るので本稿では一義的な定義を下すわけにはいかない。さらに厳密に言えば、歴史的に見た「クレオール」や現在でもさまざまな地域の「クレオール」の諸々を統一的に定義することは不可能なのである。⁴⁹⁾

2. 「クレオール語」

Pawòl la te la⁵⁰⁾ 「御言ありき」

前章では「クレオール」の定義を留保したが、ここでは言語学的見地から「クレオール語」に関する概念定義を試みることにする。「クレオール語」は「クレオール」を単純に言語領域に移行したものではなく、その対象となるものはかなり限定することが可能である。すなわち、「クレオール」の起源に焦点を合わせるにより「クレオール語」の本質に迫ることができると考えられる。(ただし、残された紙幅の関係上、かなり端折った記述にならざるを得ないのが残念である。本来ならば各方面の学説を披露して詳細に検討したいが、今回は要点のみに絞りたい。)

「クレオール語」(正確には前述のとおり「クレオール語型(諸)言語」)を考察する上で、密接に関わる概念として「ピジン語」pidgin^{50 bis)}(同様に「ピジン語型(諸)言語」)および「リングワ・フランカ(語)」lingua franca⁵¹⁾または「サビール語」sabir⁵²⁾がある。(後二者も正確には「リングワ・フランカ(語)型(諸)言語」および「サビール語型(諸)言語」である。)

「リングワ・フランカ(語)」も「サビール語」も使用場面が非常に限定された共通言語であり、使用者の母語とはなりえず、一方通行的で「ピジン語」よりも言語として不安定である。両者は全くの等価ではないが、本稿では論旨に影響がない限りにおいて等義として扱い、名称としては「サビール語」で発展過程の一つの類型を代表させることにする。

「ピジン語」は未だ使用場面が限定されてはいるものの、一方通行的な「サビール語」が双方通行になった言語である。Loreto Toddによると“A pidgin is a marginal language which arises to fulfil certain restricted communication needs among people who have no common language”であ

49) Carolyn Allenが引用しているSylvia Wynterの“creolisation”と“indigenisation”の区別のように「クレオール(化)」の厳密な検討が必要である。(Carolyn Allen, “Creole Then and Now”, pp. 41-42)

50) Jan 1 : 1. (CRL — BibleWorks, Version 5.0.)

50 bis) OEDではこの語の語源を「英語businessの転訛」に求めている。(ちなみに、語義が一つしかないOED¹ (VII, p. 833b)に比べ、OED² (XI, p. 789a-b)では語義が三つに増加している。)この他にも諸説があるが、ここでは割愛する。次の文献に五つの起源説が紹介されているので参照されたい：Peter Mühlhäusler, *Pidgin and Creole Linguistics*, Oxford : Blackwell, 1986, p. 1.

51) 「リングワ・フランカ(語)」という名称において「リングワ」linguaと「語」とは同一の意味の重複であるが、日本語における言語名称なので、このようにした。なお、「リングワ・フランカ(語)」に関してはH. Schuchardt, “Die Lingua franca”, *Zeitschrift für romanische Philologie*, XXXIII, 1909, S. 441-61および富盛伸夫「リング・フランカ」亀井孝/河野六郎/千野栄一(編)『言語学大辞典』第4巻(世界言語編下-2), 三省堂, 1992年, 895頁左欄-896頁右欄を参照。また対象地域がパプア・ニューギニアではあるが、「リングワ・フランカ(語)」の実際が次の研究にて知ることができる：Stephen A. Wurm, “Pidgins, Creoles, Lingue Franche, and National Development”, in : Albert Valdman (ed.), *Pidgin and Creole Linguistics*, Bloomington / London : Indiana University Press, 1977, pp. 333-57.

52) 「サビール語」に関しては, Schuchardt, “Die Lingua franca”, S. 442, Anm. 1: 457-58およびPierre Perego, “Les sabirs”, in : André Martinet (dir.), *Encyclopédie de la Pleiade. Le Langage*, Paris : Gallimard, 1968, pp. 597-607参照。

る。⁵³⁾ 「クレオール語」の定義をする前に19世紀半ばの「クレオール語」に対する状況を知るために『19世紀ラルース辞典』の次の記述を示しておきたい。⁵⁴⁾

La langue *créole*, dans nos colonies, à la Louisiane et à Haïti, est un français corrompu auquel on a mêlé plusieurs mots espagnols et anglais francisés. Ce langage, souvent inintelligible dans la bouche d'un vieil Africain, est extrêmement doux dans celle des *créoles* blanches. On pourrait dire que ce jargon a son génie propre ; car un fait très-sûr, c'est qu'un Européen, quelque habitude qu'il en ait, quelque longue qu'ait été sa résidence aux îles, n'en possède jamais les finesses.

クレオール語研究の前近代的な時代において“langage”と“jargon”という二つの表現がなされており、(この場合、前者にそれほど深い意味合いはないかもしれないものの)「言語」langueとして「クレオール語」をとらえていることが判る。⁵⁵⁾

現在では、この領域を専門とするか否かを問わず「ピジン語」や、中でも「クレオール語」に言及する際に紋切り型な叙述になっている嫌いがある。例えば、「クレオール語」は「ピジン語」が「母語化」したものであるとか、「ピジン・クレオール(諸語)」Pidgin(s) and Creole(s)というように必ず両者が一連の手順を踏んで発達するというような類である。このような「常識」が必然的であるかどうかは一度、検証してみても無駄ではないだろう。また、「母語化」と簡単に研究者は言うが、「母語化」とはどういうことなのか、さらに突き詰めれば、なぜ「母語化」しなければならないのかを徹底的に究明すべきであろう。(筆者の考える「母語化」の状況は後に述べる。)例えば、パプア・ニューギニアで話される tok-pisin 語 Tok Pisin (別称、新メラネシア語またはニューギニア・ピジン英語)⁵⁶⁾ は使用者の一部に限定されるにしても英語系クレオール語となっており、筆者の考える「クレオール語化」とは異なるものの「母語化」に関する絶好のデータを提供してくれる。⁵⁷⁾

研究者が「ピジン語」あるいは「クレオール語」という術語を混乱して使用しているか、または、斯界において両言語を区分すべき基準が曖昧なままになっているかの何れでもないことを筆者は祈念しているが、試みに「ピジン語」や「クレオール語」を分ける別の基準を設けてみようとするのも、結果の当否は別として学問の健全な発達を促すであろう。

また、「ピジン語」や「クレオール語」では基層話体 basilect と上層話体 acrolect の間に位置す

53) Loreto Todd, *Pidgins and Creoles*, London / New York : Routledge, 2nd ed., 1990, pp. 1-2.

54) Lar. du XIX^e s., V, pp. 490d-91a.

55) 『フランス・アカデミー辞典』の最新版である第9版では“Les parlers créoles”となっている。(Dictionnaire de l'Académie française, t. I, neuvième édition, 1992, p. 539a) ちなみに、言語学的記述が充実しているのは『ラルース大百科辞典』の“CRÉOLE”の項目(百科項目)である : *Grand dictionnaire encyclopédique Larousse*, t. IV, Paris : Larousse, 1982, p. 2760a-c.

Jargon (特に trade jargon) と「クレオール語」に関しては John E. Reinecke, “Trade Jargons and Creole Dialects as Marginal Languages”, in : Dell Hymes (ed.), *Language in Culture and Society. A Reader in Linguistics and Anthropology*, New York / Evanston / London : Harper and Row, 1964, pp. 534-46 (この論文の元刊は1938年)を参照。

56) 日本では地理的近さのためか、あるいはこの近辺でかつて戦争をしたせいとか tok-pisin 語は比較的、知られている。入門書も岩佐嘉視『新ニューギニア語入門』(大陸書房, 1975年)のように以前から刊行されており、最近では岡村徹『はじめてのピジン語——パプアニューギニアのことば』(三修社, 2005年)がある。

る多くの中層話体mesolectという連続体continuumが観察される。⁵⁸⁾「ピジン語」や「クレオール語」以外の言語でも社会言語学的ないろいろなコードが存在する中でコード・スイッチングを行っているのであり、「ピジン語」や「クレオール語」に特殊なあり方ではないにもかかわらず強調されすぎているように思われる反面、この領域での真に核心的な研究が「クレオール語化」の重要な鍵を握っていると筆者は考える。⁵⁹⁾

さまざまな状況下で成長したクレオール語を包含するフランス語系クレオール語の研究者たち、例えばPierre Peregoは「クレオール語の大半は双方通行的な「ピジン語」の段階を経ずに一方通行的な「擬似サビール語」から発達した」としており、⁶⁰⁾ またRobert Chaudensonも綿密な社会史的考察から「植民地社会の初期段階はピジン語を発達させなかった」ことを示した。⁶¹⁾ さらにChaudensonはRobert Anderson Hall, Jr.が提唱する「クレオール語」のライフ・サイクルlife-cyclesの理論⁶²⁾を否定し、「[植民地の] アビタシオンhabitationはピジン語が出現する社会言語学的条件をまったく与えなかった」と反論している。⁶³⁾

「ピジン語」と「クレオール語」とは決定的に異なり、前者は限られた場面でしか用いられない言語であり、後者は子々孫々に代々伝える言語であるという点で使用者の意識に大きな差があることを指摘しておきたい。さらに奴隷制および大規模農園制の下で奴隷として隷属させられている側にとって主人側の言語は「限られた場面」でしか用いない言語などというようなものではなく、常に生死に関わる文字通りの生命線であり、自分達が育った深い愛着を持つ母語よりもこの意味で遥かに重要でかつ緊急を要するものであったと考えられる。雇い主と話が

57) トク・ピジン語を細川弘明「ピジン諸語」(亀井他(編)『言語学大辞典』第3巻,三省堂,1992年,432頁右欄-437頁右欄)では「一部、クリオール化が進んでいる」(437頁左欄)としており、西江雅之「トク・ピジン」(同辞典,第2巻,1989年,1297頁左欄-1305頁左欄)では「英語語彙系ピジン・クレオール語」に分類している。

かつてラジオ放送の鼎談番組で和田祐一はこの言語を話題にしながら、「英語の国際的でない属性をピジンはどこ[どんな地域]でも切り落としている」と言い、崎山理は「ピジン語」の特徴として「簡素化、体系化、土着の文化の影響」の三つを挙げたが、このうちの「簡素化」を和田は「合理化」と修整していた。(和田祐一/松澤貞子/崎山理「外国語への招待・フィールドワークは言葉から(2) [言語のピジン化について]」NHKラジオ第2放送,1985年11月8日放送)日本における「ピジン・クレオール」研究ブームの中での1シーンである。当時、Derek Bickerton, *Roots of Language* (Ann Arbor: Karoma, 1981)の出現を受けて、1985年4月にその邦訳であるデレック・ビッカートン『言語のルーツ』(寛壽雄/西光義弘/和井田紀子(訳),大修館)が刊行され、同年11月に『月刊・言語』(14巻11号)が特集「ピジンとクレオール——民族が会おうと言葉が生まれる」を組み、翌1986年7月にはロレット・トッド『ピジン・クレオール入門』(田中幸子(訳),大修館)が出版されるという言語研究の潮流が思い出される。またもや日本の言語研究は東方の海の彼方より光がさしたのであった。

58) Derek Bickerton, "The Nature of a Creole Continuum", *Language*, XLIX, 1973, pp. 640-69参照。

59) John Holm, *Pidgins and Creoles*, 2 vols., Cambridge / [...] : Cambridge University Press, 1988-89 や細川弘明「ピジン・クレオール諸語」(亀井他(編)『言語学大辞典』第3巻,三省堂,1992年,437頁右欄-466頁右欄)のようなあらゆる「ピジン語」および「クレオール語」、そしてその基体となる諸言語を扱ってはじめてこの領域で価値のある貢献ができると筆者は考えている。そしてかつてのEdward SapirやLouis Hjelmslevのようなポリグロットが言語理論の発展に多大な寄与をなしたのと同じく、将来、この領域から大言語学者が誕生することを密かに期待している。

60) Pierre Perego, "Les créoles", in : André Martinet (dir.), *Encyclopédie de la Pleiade. Le Langage*, Paris : Gallimard, 1968, p. 608.

61) Chaudenson, *Les créoles*, p. 68. 引証した節の標題も"Pour en finir avec les pidgins !"と刺激的である。

62) Robert A. Hall, Jr., *Pidgin and Creole Languages*, Ithaca / London : Cornell University Press, 1966 (4th printing, 1979), pp. 126-30.

63) Chaudenson, *Les créoles*, pp. 62-63.

通じなければ職が求められず、賃金がもらえないという程度のことは全く異なり、まさに命がけの伝達手段であったということをこの道の研究者は深慮すべきである。

Chaudensonは「クレオール語」という術語の使用を限定させるべく次のように言う：“Si l'on nomme «créole» toute langue qui s'est formée, à partir d'autres langues, en situation de contact linguistique, il n'y a guère de langue au monde qui ne puisse se voir appliquer ce qualificatif. [...] Ils peuvent toutefois se retrouver aussi dans toutes sortes d'autres situations de contacts de langues, sans qu'on doive, pour autant, qualifier de «créoles» les idiomes qui les présentent.”⁶⁴⁾ つまり、「言語接触の状況下で形成された言語を全て「クレオール語」と言うのならば、この名称が付けられない言語はほとんどない。しかしそういった言語を必ず「クレオール語」と称する必要はない」というのである。「バイオプログラム理論」bioprogram theoryの提唱で一躍、脚光を浴び、かつクレオール語研究を飛躍的に活性化させたDerek Bickertonも「性質の異なる状態を含むので[[クレオール語]に対する]伝統的な定義は広すぎる」と考えており、「[[クレオール語]は]固有な集合体を構成しない」とまで言っている。⁶⁵⁾

ここでChaudensonによる「クレオール語」の定義を見てみると、⁶⁶⁾

Les créoles sont des langues, nées de la colonisation européenne des xvii^e et xviii^e siècles, dans des sociétés, pour la plupart insulaires, où l'arrivée massive d'esclaves, rendue indispensable par le développement agro-industriel, a modifié le mode de transmission de la langue européenne.

であり、そして次のように続くのである。⁶⁷⁾

La créolisation résulte de l'appropriation par les nouveaux esclaves de variétés périphériques de l'idiome du colonisateur ; cette appropriation approximative, en quelque sorte portée au «carré», s'est accompagnée d'une perte de contact avec le modèle central et a entraîné une autonomisation de ces variétés linguistiques périphériques.

Chaudensonの極めて限定的な定義に基けば、巷間で言い慣わされているような言語と言語のあらゆる接触、あるいはその結果、生じた言語を見境なく一括りに「クレオール語化」とか「クレオール語」と呼ばずにすむのである。

本稿では「クレオール語」の定義としてこのChaudensonによる定義を援用しながらも、その基体となる言語をヨーロッパ諸言語のみに限定せず、世界各地で同様な極限状況下で生じた言

64) *Ibid.*, p. 13.

65) Bickerton, *Roots of Language*, pp. 2-3. そしてBickertonは「クレオール語」という名称で次のような言語を指すことにしている。(*Ibid.*, p. 4. よって、Bickerton自身も明記しているように下記の基準に従えばトク・ピシン語もレユニオン・クレオール語もゴアやマカオのポルトガル語系クレオール語も「クレオール語」から除外されるのである!)

I shall use the word *creole* to refer to languages which :

- 1) Arose out of a prior pidgin which had not existed for more than a generation.
- 2) Arose in a population where not more than 20 percent were native speakers of the dominant language and where the remaining 80 percent was composed of diverse language groups.

66) Chaudenson, *Les créoles*, p. 93.

67) *Ibid.*

語にも適用できるように一般性を持たせ、なおかつ母語の使用の突然の中止と基体となる言語の火急的習得といった抑圧された状況を加えて次のような定義を行うこととする。

「クレオール語」とは、島嶼や「陸の孤島」と言われる他の地域と隔絶された閉ざされた社会において、例えば、大規模農業を支える際の奴隷としての隷属等のような拘束された極限状況下で、抑圧的かつ衝撃的、突発的に再構造化された言語である。

「クレオール語」が生まれる際に「母語化」によって再構造化が確立されるのであるが、それは奴隷が家族を持つことを許されず、生まれた子供たちは一箇所に集められ、親からは言語を継承することが困難であるという状況の下で達成されるのである。

ヨーロッパ諸国の植民地であっても「クレオール語」が生じなかった地域があり、また奴隷狩りにより突然、動物同様に身体を拘束されたうえ、あえて言語の異なる者達が集められ、連行先では命がけの言語行動を強いられたという現実を凝視すれば、「クレオール語」(そして「クレオール」)という術語の広範で安直な使用は当然、控えるべきであるということが理解できるであろう。「クレオール語」という名称で「混成言語」全般を指すこともまったく必要のないことであり、より厳密かつ限定的な使用を心がけるべきである。

我々はかつて「言語接触」という術語をUriel Weinreichが厳密に規定したにもかかわらず⁶⁸⁾、安易に単なる「言語の影響」程度の現象を「言語接触」という名の下で一般化してしまった経緯がある。このような一般化のために当該現象のみが貢献しうる貴重な情報を見過しているとすれば言語学という学問にとって大きな損失である。言語研究に携わる者が「クレオール語」でこのような轍を踏まないことを期待するばかりである。

3. 今後の展望

Ki bò ou prale ?⁶⁹⁾ 「何処へ」

前章で「クレオール語」の概念定義を試みたが、まさにJohn E. Reineckeが言うとおりの“The plantation creole tongues are true *Sklavensprachen*”なのである。^{69 bis)} “The contact between speakers of the great ‘civilised’ languages and the slaves they owned but did not bother to educate, produced a host of *Créole* languages”^{69 ter)} と述べるRebecca Posnerのややアイロニカルな言葉にはアフリカのガーナで教鞭をとりながら研究を行っていたロマニストの熱い視線が筆者には感じられる。「クレオール語」研究を一時的なブームへの便乗としか捉えられないような研究者や机上でのみデータを操作する言語学究にはない感性である。

筆者はかつて「言語接触」に関して簡単にまとめたことがあり、⁷⁰⁾ Theodor Capidan⁷¹⁾ やNt-

68) “In the present study, two or more languages will be said to be IN CONTACT if they are used alternately by the same persons.” (Uriel Weinreich, *Languages in Contact. Findings and Problems*, The Hague : Mouton, 2nd printing, 1963, p. 1)

69) Jan 13 : 36. (CRL — BibleWorks, Version 5.0.)

69 bis) John E. Reinecke, “Trade Jargons and Creole Dialects as Marginal Languages”, p. 540a.

69 ter) Rebecca Posner, *The Romance Languages. A Linguistic Introduction*, Garden City, New York : Doubleday, 1966, p. 285.

κόλαος Γ. Κοντοσόπουλος⁷²⁾の著述をもとにルーマニア語メグレノ・ルーマニア方言およびギリシャ語カッパドキア方言などを調べて、周辺言語からの影響を概観した。その際に「ピジン化」という文言を使用したのが、幸い「クレオール化」という言葉は終ぞ書くことはなかった。今になって思えば猿真似はしたものの無知なるが故に不面目を免れたのであった。対象を深く学べば、巷間に流れる言葉の根拠のない曖昧さに気づかされることがある。例えば、“Sprachbund”で有名なバルカン半島の諸言語間の類似性に関する研究は「バルカン言語学」として独立した学問領域の道を歩んでいる。⁷³⁾しかし精緻な考察を行う研究者にはその欠点も見えてくるのであり、例えば、泉井久之助は未来表現や「接尾定冠詞」を詳しく考察し、それらがバルカン半島の諸言語内で個別に発達したものであったり、バルカン半島以外の遠隔地の言語でも見られるものであったりすることからバルカンの言語圏の統一を重視しすぎることを戒めた。⁷⁴⁾そして「従来、一般にこの種の現象に対して一種の「バルカンの神秘性」を賦与して考える傾向があった。われわれはあまりにそれらを深刻に考えすぎてはならないと思われる」⁷⁵⁾と言う泉井の言葉はそのまま我々に「クレオール語の神秘性」への戒めとして響いてくるのである。

橋本萬太郎はかつて「ピジンやクレオールが何となくまともなものでなくて、まともな言語学者がまともに扱うに値するものではないかのような印象が拭われだしたのは、まだそんなに古いことではない」と言い、⁷⁶⁾「ピジン語」や「クレオール語」への偏見に対する不快感を露にしている。しかし、橋本の考える「ピジン・クレオール現象」とは本稿の定義とはやはり異なるものである。⁷⁷⁾日本で海外留学にあこがれて英語を学ぶ場合と、ある国で立身出世に役立てるために支配者階級の言語を学ぶ場合と、そして本稿で既述したように動物並みに扱われ、生殺の与奪権が相手側にある時に相手の言語を必死で学ぶ場合との三つの場合を全て同次元に論ずることは無意味である。さもなければ、「ピジン・クレオール」研究の落とし穴が待っているかもしれないのである。

70) 拙稿「言語接触について」『名古屋大学人文科学研究』18号, 1989, pp. 47-50.

71) Th. Capidan, *Meglenoromâni*, 3 volume, București : Cultura Națională / Imprimeria Națională, 1925-[35].

72) Νικόλαος Γ. Κοντοσόπουλος, *Διάλεκτοι και ιδιώματα της νέας ελληνικής*, Αθήνα : Ελλάδα, 1981.

73) デンマークのKristian Sandfeldは1926年に「バルカン言語学」の概要をまとめて、問題提起した。(Kr. Sandfeld, *Balkanfilologien. En oversigt over dens resultater og problemer*, København : Bianco Luno, 1926. 増補改訂フランス語版は*Linguistique balkanique. Problèmes et résultats*, Paris : Champion, 1930 ; 同フランス語版の復刻版はParis : Klincksieck, nouveau tirage, 1968)

74) 泉井久之助『ヨーロッパの言語』岩波, 1968年, 90-109頁.

75) 同上書, 95頁.

76) 橋本萬太郎「現代の言語研究の根幹にかかわるピジン・クレオール現象」『月刊 言語』14巻11号, 1985年11月, 80頁上段.

77) 筆者は橋本萬太郎『言語類型地理論』(弘文堂, 1978年)を手にした時に、言語学の何かが変わるかもしれないという衝撃を受けた。中国語諸方言の統語構造や韓国・朝鮮語の音調アクセントを類型地理論の観点から論じた日本人の研究書がそれぞれの地で翻訳されるといふ快挙を成し遂げただけでなく、事の本質を見抜く力量は並外れたものがあつた。早すぎる永逝が惜しまれる。同書の中国語訳は：橋本万太郎『語言地理類型學』余志鴻(譯), 北京: 北京大學, 1985; 韓国・朝鮮語訳は：橋本萬太郎『언어지리유형학』하영삼(을김), 서울: 학고방, 1990.

後に、関係者から橋本が当初、ロシア語を学んだことを聞き、橋本の諸々の言動、中でもソ連領内(当時)の東干語研究との関連が納得できたとともに「ハイブリッド性」が研究面でも必要であることを認識した。

「クレオール語」や「ピジン語」の研究は言語学にいろいろな収穫をもたらすことは誰もが予想することであるが、⁷⁸⁾ そのためには確たる概念定義の下に研究を遂行する必要がある。決して他人が言ったことを無批判に受け入れ、それを繰り返すという単純な再生産では言語学の新しい潮流は生まれないのである。最後にChaudensonの言葉を引用して「クレオール語」の本質を示して本稿を閉じたい。⁷⁹⁾

On sait désormais que les créoles ne sont pas des langues caractérisées par des structures spécifiques, mais plutôt par une histoire particulière dans laquelle les aspects sociolinguistiques sont, à coup sûr, déterminants.

(すでにおわかりだろうが、クレオール語をクレオール語たらしめているのは、それが言語的に特有の構造をもつからではなく、むしろ、社会と言語との関係が決定的であるような特別な歴史を背負ったことばであることによるのである。)

Li gen pou l' cheche tout dlo nan je yo. (Revelasyon 21 : 4)⁸⁰⁾

78) 最近では第二言語習得との関連で次のような研究書が刊行されている：Jeff Siegel, *The Emergence of Pidgin and Creole Languages*, Oxford : Oxford University Press, 2008.

79) Chaudenson, *Les créoles*, p. 123. 邦訳はショダンソン『クレオール語』168頁.

80) Revelasyon 21 : 4. (CRL — BibleWorks, Version 5.0.)